

聖書：第一列王記1章1～10節

説教：だれが私たちの王なのか

1 ダビデ

1) 年老いていく

年齢を重ねてくると聖書の読み方も変わってきます。若いとき、例えばサムエル記を開くと、ダビデがいろいろな失敗を繰り返しながらも、活躍し前に進んでいく、それが理想的な信仰者の姿であるとして読むのですが、ダビデが年老いて寝たきりになるところはぴんと来ないのです。ところが、そのうちに高齢の親を介護するようになり、自分もそれなりの年齢になってくると、若い頃に見過ごしていたところに心が留まるようになってきます。

改めて聖書の奥深さを思わされます。聖書には、若くてハンサムで輝くようなダビデだけが書かれているのではないのです。体が不自由で寝たきりになり、人の世話を受けなければならぬ、そんなダビデの姿まで隠すことなく描きます。そればかりか、ダビデの息子であるアドニヤが跡目争いをおこしてもめ事になる。これはダビデ家の歴史から言えば、恥ずかしい話です。普通なら絶対に載せません。ところが、聖書は全部包み隠さず恥ずかしい話も載せていきます。

なぜでしょう。いつも言いますが、聖書は罪人である私たちを救うために神が与えてくださった救いの書です。救いと関係のないことは書きません。どこを開いても救いと関係があるはずで、では、ここにどんな恵みがあるのか、いっしょに考えてまいります。

2) シュネム人の女アビシャグ

年をとると寒がりになる。これは親の介護をした経験した者ならだれもが直面する事実です。ダビデも同じでした。どんなに布団をかぶせてもらっても寒いと訴えます。そこで家来たちは相談の結果、シュネム人アビシャグを連れて来て、ダビデの世話をさせることにしました。今の時代から見れば、これはどうなのかと首をかしげる話です。でも、この時代には、第二婦人をもらうことはあたりまえのこととして行われ、聖書も特に問題にしているわけではありません。もちろん、聖書の原則から言えばふさわしくないことです。神は、このことを時間をかけてただしていきます。

このシュネム人アビシャグの名前は、ダビデが死んだ後、2章17節の所でアドニヤの口から出て来ることとなります。このことがきっかけでソロモンはアドニヤを殺すこととなります。そのいきさつについては、その時に話すことになるでしょう。

2 アドニヤ

1) 王位継承権

さて、きょうのもう一人の登場人物はアドニヤという人です。ダビデには少なくとも十人以上の奥さんがいて、少なくとも二十人以上の子どもがいたことがわかっています。第二サムエル記3章4節によると、長男はアムノン、次男がキルアブ、三男がアブシャロム、四弟がアドニヤです。いま日本では天皇家の皇位継承権ことが話題になっているように、ダビデの時代もまったく同じ問題が起きて

いました。ダビデが寝たきりになったということになると、では次はだれが王位を受け継ぐのか。みなざわざわし始めます。天皇家と同じように、まず長男が一番目の権利を持っています。しかしアムノンは若いときにアブシャロムに殺されています。キルアブは聖書にほとんど名前が出て来ないので、おそらく病死したのだろうと言われています。アブシャロムは、ダビデがまだ元気だったときに、王となろうとして刃向かい、戦場で倒れました。アドニヤにしてみれば兄たちが全員死んでしまったのですから、ダビデに万が一のことがあれば王位を受け継ぐのが自分であると考えるのは当然のことでしょう。それだけではない。もうひとつ彼にとって有利な材料がありました。父であるダビデから非常にかわいがられていて、しかられたことがなかったと書いてあります。アドニヤの兄たちが、次々と父親を悲しませるようなことをして死んでいくのを見て、慎重に行動していたのかも知れません。

2) ヨアブとエブヤタルに相談する

ですからアドニヤには、自分が王となることに父ダビデは賛成してくれるかも知れないという計算があります。とは言え、一人だけで自分が今日からイスラエルの王であると、勝手に声を上げるわけにはいきません。人々の支持が必要です。そこでアドニヤはヨアブとエブヤタルに相談をします。

ヨアブはイスラエル軍の指揮官で、ダビデの側近です。でもダビデとはよい関係にあるとは言えません。いろいろと複雑な感情が二人の間にわたかまっています。

エブヤタルには特別な過去があります。ずっと昔、ダビデがサウルから逃れ、食料を

求めてエブヤタルの父アヒメレクの所を尋ねてきたときの事です。そのことがやがてサウルに知られ、出頭を命じられ、結局、ダビデをかくまった罪をかぶせられ、家族全員がサウル王に虐殺されてしまいました。エブヤタルはそこから逃げて、ダビデの保護を受けて祭司という立場ももらいました。でもダビデのために、家族は殺された、そんな複雑な感情を心の奥底に持っていたのかも知れません。

アドニヤは、自分の味方になる者を探していたとき、この二人に目をつけます。いづれもダビデに対して距離をおいていました。ヨアブとエブヤタルは、ダビデに見切りをつけ、アドニヤを新しい王として推薦いたします。

3) 招いた人たち、招かなかった人たち

早速、アドニヤはエルサレムから少し離れた所にある、エン・ロゲルに支持者たちと自分の兄弟たちを招き、イスラエル王の宣言式を開くことにします。

私たちはふだんはあまり考えませんが、いざ結婚式とか葬儀となり、友人たち、近親者、縁者たちを招かなければならないと言うとき、誰を招き、誰を招かないかを意識することになります。気に入らない者がいれば、あえて声をかけない。そういうことも起きます。アドニヤは、自分の支持者だけを招き、ダビデを支持する者たちには声をかけません。もっとも相談すべき父ダビデにさえ知らせずに、勝手に王となろうとします。もっと言えば、自分が王となるために、父に死んでもらいたいと願っています。

3 だれが王になるのか

1) 主に油注がれた者 (第一サムエル記 16

章 12 節)

ダビデはすばらしい信仰者だったかも知れませんが、子どもたちを信仰者として育てると言うことに関しては、かなり問題を抱えていました。父が死ぬ間際になると、相続権をめぐる父に刃向かうような子どもの育て方をしてしまいます。

いまなら珍しくない話かも知れませんが、どうしてこのようなことが聖書に詳しく書かれているのか。そのことを考えます。

ここで問題となっているのは、だれがダビデの後を継いでイスラエルの王となるかです。そもそもダビデはどのようにして王となったか。第一サムエル記 16 章 12 節にあります。「エッサイは人をやって、彼を連れて来させた。その子は血色のよい顔で、目が美しく、姿もりっぱだった。主は仰せられた。「さあ、この者に油を注げ。この者がそれだ。」「この者がそれだ」と言って、主は、ダビデがイスラエルの王となることをサムエルに教えました。イスラエルの王は、主が選んだ者しかなることができない。自分が王位継承権の筆頭にいるから自動的になる、のではない。自分がやりたいから、名乗りを上げるものでもないのです。

しかし、アドニヤはそのようなことはいっさい無視します。ダビデが弱くなってきたことを見て、強い者が王になるべきだと考え、計略を張り巡らしていきます。

2) 主イエス・キリスト

イエス・キリストのことを考えたいと思います。主は、イスラエルの王となるために、私たちのところへ来られました。ダビデの末ですから血筋は問題ありません。ヨルダン川でヨハネから洗礼を受けたときも、天が開け

て聖霊を受けられました。主がひとり子を選び、油を注いでいます。王位継承権から言えば、もっともふさわしい方です。では、この方は、自ら自分こそイスラエルの王であると名乗ったのでしょうか。いいえ。何も言いません。むしろ、人々から誤解され、はじき出されていきます。ヨハネ 1 章 11 節にこうあります。「この方はご自分のくにに来られたのに、ご自分の民は受け入れなかった。」そのようにして十字架につりました。十字架の上で最も弱くなられました。それがイスラエルの王だったのです。

アドニヤは思いました。強くて若い者こそが王となるべきである。ところが主の向かった所はまったく正反対。イスラエルの王は弱くなる。殺される。捨てられる。裏切られる。ののしられる。この世のありとあらゆる恥を受けます。それが本当のイスラエルの王だったのです。

弱くなることになにか望みがあるのでしょうか。あると言っているのです。強い所に望みがあるのではない。弱い所にこそ望みがある。それが十字架の死であり、よみがえりでした。アドニヤは、弱いことを受け入れません。ダビデをもうろくしたじいさん、死んだ者と扱います。そんなアドニヤはどうなったでしょう。次の王となったソロモンに一度赦されるのですが、王座への執着し続け、ソロモンに殺されてしまいます。

弱さを受け入れることは難しいことです。自分が年を重ねて不自由になっていくことを認めたくありません。でも、主は進んで弱くなられました。私たちの先に主がおられることを覚えながら、弱くなる道を歩んでまいります。